

平成29年度 母親世代タスクチーム（第3回）概要報告

開催概要

日 時：平成29年6月2日（金）10：00～14：00

場 所：ボーイスカウト会館9階会議室

テーマ：わが子にとって、母親にとってボーイスカウトとは

1. わが子をボーイスカウトに入れた最後の決め手は何だったのか？
2. わが子がボーイスカウト活動を楽しんでいる理由は？
－どんな指導者が魅力的なのか ーどんな活動が楽しいのか
3. 「こう成長して欲しい」という親の思いは満たされつつあるか？
－満たされつつある理由、満たされない理由

構成員

母親世代タスクチーム員 9名（関東ブロック構成県連盟からの推薦者）

団支援・組織拡充委員会 委員 木村寿宏、委員 澤朋宏

事務局組織・管理部 部長 佐藤栄保、課長 額谷征幸、職員 清水美保

社会連携・広報部 職員 深見泰子

トークセッションまとめ：

1. わが子をボーイスカウトに入れた最後の決め手は何だったのか？

(1) 選択肢

- ・ボーイスカウトは選択肢の一つだった。親としては、ほかの運動でも何でも良かった
- ・特にボーイスカウトというわけではなく、「なにか」やらせたい中の一つだった

(2) きっかけ

- ・ボーイスカウトに知人がいた、チラシをもらった、市報に載った。これまで遭遇しなかったのに、たまたまそういうことが重なり、連絡するきっかけとなった
- ・ボーイスカウトに入っていた人から声をかけられた
- ・友だちに声をかけてもらったので体験に行った
- ・年長の時に、ボーイスカウトに子どもを入れている友人から声をかけられた
- ・子どもがなついている近所のお兄さんは、振る舞いが良く、ボーイスカウトだった
- ・制服が格好いいと思っていた

＝チラシについて＝

- ・チラシは見たことない
- ・Q)学校でチラシを配れることが許されていますか？
A)YES、所定の場所に置くだけならOK（手配りは不可）、クラスによる、NO

(3) きっかけに対して保護者のアプローチ

- ・ボーイスカウトをしているという知人に相談し、「大きな団がいいよ」と聞いて、インターネットで調べた
- ・近所の団を探してコンタクトを取り、見学に行った

(4) 決め手

-1. 環境

- ・学校とは違う環境（厳しいだけではない。温かく見守ってくれる）と感じた
- ・本当は狭い社会に居ること、もっと広い社会があることに気付いてほしかった（ボーイスカウトは、いろんな学校からいろんな子が集まる環境）
- ・学校の先生とは違う大人と接触できる
- ・学区外の子と遊べる。学校を離れてストレス発散ができたり、リフレッシュできる場所
- ・幼稚園のお友だちとは学区が違えば離れてしまうので、ボーイスカウトで繋がっていたい
- ・団のイベントに、たまたま学校とは別で知り合った友だちが来ていて、一緒に入った
- ・普段（ボーイスカウト以外の環境で）やっていることを隊の中でもやってみて、その反応の中で“気づき”として感じてもらいたいことがあった
- ・家族以外の縦社会を経験させたい
- ・親以外の大人や地域の人と斜めの関係を築いてほしい
- ・ビーバー隊長の1時間の講義で、ビーバー、カブ～成人までの将来を見据えた内容を聞き、将来こうなるというのが、自分(保護者)の中にストンと落ちた
- ・イベント(夏祭り)に遊びに行った。そのまま自然に溶け込める雰囲気が団にあった
- ・2人の未就学児を連れて見学に行ったら、3人とも仲間に入れて一緒に見てくれた
- ・体験を繰り返していたら、募集説明会に誘われて参加。その場で、ほかのお母さんと3人で意気投合して一緒に入った
- ・団のホームページを見たら、どの写真も子どもたちがとても良い顔をしていた

=ホームページについて=

- ・団のホームページは硬い印象があるので、発信手段を変え、ほかのツール(FacebookやTwitterなど)も立ち上げたらどうだろうか

-2. 指導者

- ・隊長と、電話連絡をくれた指導者の対応が良かった
- ・体験の時に、必ず一人指導者がつき、丁寧に説明をしてもらえた
- ・団委員長にカリスマ性を感じた。「この人についていけば…」

=体験時の指導者の対応について=

- ・体験の時は詳しい説明はなく、子育てお悩み相談に近い感じで指導者と話した
- ・見学や体験の時には、手厚い説明はなく、終わってから「どうでしたか？」もなく、入るまでの検討期間中に「どうですか？」の連絡もなかった
- ・インターネットで口コミを調べたら「宗教がらみじゃないか」という投稿もあったので、指導者から「どうですか？入りませんか？こんなことをしていますよ」と説明されていたら引いていたかもしれない。体験時やその後に声をかけられなかったことが、逆に入ることに繋がった

-3. プログラム

- ・年長時の体験の際に、お揃いの帽子を貸してもらえた。「1年したらあっち(ビーバーキャップ)がかぶれる！」
- ・何度も体験させてもらえるのが良かった。一度目は、知らない環境の中で子どもは委縮している
- ・特定のスキルを伸ばす(サッカーならサッカーが上達する)というのとは違い、いろいろなことを学べる場が整っている
- ・体験プログラムを子どもが楽しめた

- ・募金活動も経験してみて本人がきちんとやるなら、入れても良いと思った（ボーイスカウトは楽しいだけじゃないことも知ってから決めさせたかった）
- ・保護者が何かを考えるのは難しいが、企画してくれる場所に連れていくことはできる
- ・イベントは保護者が準備するのは難しい。ボーイスカウトにはそれが準備されている
- ・自分(保護者)は外も汗だくも苦手だけれど、子どもにはそれをやってほしかった

2. わが子がボーイスカウト活動を楽しんでいる理由は？

-1. スカウトの目線

- ・年齢縦割りのカブスカウトは、子どもにも解りやすいらしい。先輩から言われることは素直に聞けるようだ
- ・学校の先生や親以外の大人や、お兄さんたちから言われることで、すっと入ることがある
- ・ちょっとしたことを褒めてもらえる。子どもたちは良い気持ちで帰ってくる
- ・プログラムが楽しい。予定表を見ているだけで引き込まれる魅力的な内容
- ・プログラムの計画表が「次、来年はこういうことをやるんだ」が見えてワクワクできる
- ・おらかな副長と見守ってくれる隊長
- ・他隊の指導者もみんなで子どもを見てくれている。受け止めてくれている。体制が整っている
- ・各隊の指導者の行き来があり、知らない指導者がいない
- ・スカウトも保護者も「次の隊長はこの人だ」と知ることができている。カブへの上進時にも不安がなかった
- ・隼を取った先輩スカウトのスピーチを聞いた。目指すべきスカウトスタイルを見せてもらえた
- ・特に私立に通う子どもは地元の友だちがいない。「ボーイスカウトにいと、地元の友だちができるから辞めるなよ」と言ってくれる先輩スカウトがいる
- ・学区が違って仲間意識がある
- ・「ボーイスカウトって、どんな存在？」 スカウト「わかんない。でも楽しい」
- ・「ボーイスカウトの何が楽しい？」 スカウト「何がと言われたら“ぜんぶ”だよ」
- ・テーマについて自分たちで考えて、やる、ということが楽しい
- ・仲間が参加できないとなると楽しみだったイベントに対して気持ちが転じてしまう。一緒に上がっていける仲間がいると良い

-2. 保護者の目線

- ・今一緒にいないと、この先は段々一緒に過ごせなくなる。成長を見逃してしまう。親として貴重な時間であり、ありがたい
- ・親子家族で共通の話題が持てる。子どもと繋がっている
- ・最初は「大変だ」ということが先に立っていたが、一緒に関わっていると、あとあと子どもにとって良い思い出として残っているはず。「お母さん(お父さん)、あの時、いてくれたよね」
- ・一人ひとりの成長が見える。ほかのスカウトを見ることで、自分の子どもの長所短所が見えるようになる
- ・保護者同士でスカウトを見ている。自分が見ることができない日でも、ほかの保護者が「こんなことができていたよ、すごいね」と教えてくれる
- ・キャンプの計画は大変だが、活動の意義を子どもにわからせたい
- ・保護者同士がつながり、進学のことなども相談できる
- ・いろんな個性の子どもを受け入れられる指導者が揃っている。
- ・少しのことでも褒めてくれる指導者。親も勉強になる
- ・指導者は、活動がない週は下見に行っている。頭が下がる

＝活動頻度＝

- ・Q) 月々の活動頻度はどのくらいですか？
A) 月3回、月2回、時期によって（月2回～キャンプ前は毎週）
---スカウトも、指導者も、家族での時間も作らないと

＝活動にあたって＝

- ・何をしたらバッジをもらえるのか、カブ最初1年くらいわからなかった。子どもにも保護者にも説明がなかった
- ・カブ上進時に説明がなかった。何をやるのか、どうすれば良いのか、子どもが自発的にやるべきなのか、指導者の導きがあるのか、親がサポートをしていいのかがわからなかった
- ・菊章や富士章を取るために、そこにたどり着くには、今、何をして何を修めていけば良いのか分からない。将来に向けて、やるべきことが見えると良い
- ・活動の後、迎えに行っても「今日はこうでしたよ」というお話はない
- ・詳しい説明はない。でも保護者は不安には感じていない。カブブックを見ても何をどうしたら良いのか分からないが「聞けば分かるだろう」と思っている

＝保護者のかかわり＝

- ・体験の時に、指導者ではなくスカウトのお母さんに声をかけてもらった。制服の人に言われるより、お母さん同士の方が伝わりやすい（緊張がない。説得力がある）
- ・組が違っても、保護者同士で見えてくれる
- ・指導者で手が足りないことを保護者がフォローする体制が、自然とできている
- ・保護者は必ず活動について行く。スカウトが多いので、自主的に手伝う
- ・保護者同士で顔を合わせることがない
- ・保護者会も決まった人しか来ない
- ・手伝いに来てください→手伝いに行く「なにをしましょうか？」→「大丈夫です」と言われる。指導者も悩んでいるのだと思う。「頼みすぎたら辞めてしまうのでは…」
- ・スカウトが増えている団は、ゆるい保護者も増えているので、指導者は大変だと思う
- ・父親はアウトドア派ではないが、ビーバーの活動に連れて行ってくれるようになった
- ・お母さんの横のつながりができているので、スカウトが辞めない
- ・人数が少なくても“地固め”（お母さん同士のつながり）ができていれば、スカウトは増える
- ・お迎えにきても車の中から降りてこない保護者もいるが、声をかけ話をしたりして仲間になると良いのでは

＝先輩スカウトの声＝

- ・Q) なぜボーイスカウトを続けているの？(いたの？)
A) 自分を認めてもらえる場所だった
- ・自分の意見を聞いてもらえる。実現できる場所だった。学校では、なかなかそういう場はないが、ボーイスカウトでは、みんなが意見や計画を聞いてくれ、実現するために実行できる
- ・就職面接に困らなかった
- ・ボーイに上がったときはカブの方が楽しかった---デンリーダーがやってくれるからベンチャーに上がったときはボーイの方が楽しかった---自分で計画して実現できるからローバーになったらベンチャーの方が楽しかった---自分で考えられるから
- ・指導者まではいけない。では、どこまでやるのか？との葛藤がある

＝必ずやってくる決断のとき＝

- ・ 上進時は、選択の時期。ほかの習い事か、ボーイスカウトか、両立か
- ・ カブへの上進は、1度目の決断のとき
- ・ 中学校は部活動が必須なので、子どもは悩む。運動部は活動頻度が高い
- ・ 中学校に上がるときに、部活とボーイスカウトとほかの趣味をどうするかで悩んだ末、菊章を取るという目標を立てて3年間ボーイスカウトを頑張ると決めた
- ・ 部活とボーイスカウトのどちらのことも、指導者が応援してくれている
- ・ 部活との両立を選択し、出られるときだけボーイスカウトの活動をした。指導者にも、それで良いと言ってもらえた
- ・ 将来の夢があり、そのためのイベント事の日程が、ボーイスカウトの活動と重なることが多いので、ボーイスカウトを辞めたいと言っている
- ・ 部活と掛け持ちしてスケジュールがハードな時もあるが、楽しそう

3. 「こう成長して欲しい」という親の思いは満たされつつあるか？

(1) ボーイスカウトの魅力と子どもの成長

- ・ ボーイスカウトの魅力は「多様性」。いろんな体験ができることは保護者にも子どもにも魅力的
- ・ 学校や習い事など、ほかにはない「生きる力」「社会に出て役立つこと」を学ぶ場
- ・ 学校の中では、できる子、する子が決まっている。球技などはいつもうまい子がレギュラー。しかし、ボーイスカウトでは、必ずカブで組長を経験させてもらえる
- ・ 長を任せられ、人の配置がうまくいくと嬉しいと感じている様子、ハイキングで達成感を覚えた様子、メモを取って集合をかけたたり下のスカウトの面倒をみている様子を見て「環境を与えないと、子どもは自分だけで見つける力がない。環境を与えれば、可能性がある」ことを知った
- ・ 集団で活動するということが大事と感じた。ハイキングも仲間がいたから最後まで歩けた
- ・ 最優秀スカウト賞をもらったことがあった。授賞理由は「黙々と文句を言わず何でもやる」。認めてもらったことがきっかけになり、そこから変わった
- ・ 「くまスカウトになると変わるよ」経験のあるほかの保護者から言われた
- ・ カブに上進して変わった。自分のことは自分でできるようになった
- ・ ほかの習い事は雨が降っていると送ってと言うのに、ボーイスカウトに行くときは声をかけても大丈夫と言う
- ・ マイペースの班が遅れをとっても、大きな問題が起きない。ほかの班のスカウトも見守るし、自分たちで最後まで何とかしようとする
- ・ どうしなければならぬか、考える力がつく
- ・ どちらを優先するか、見極める力をつけるようになれる
- ・ 時間を守れる。間に合うように自分で支度できる
- ・ 手伝おうと声をかけると、支度が済んでいる
- ・ 体力的にも強くなった
- ・ 場所見知り、人見知りをする子どもだったが、学校とは違う“学ぶ場”で、親が居なくてもできることが増えたと感じる
- ・ 2時間に渡るキャンプの事前説明も、ちゃんと聞くことができた
- ・ 手旗が苦手だったが、あるとき遅い時間まで練習していたと聞いて「こういう面があったのか」と知り嬉しかった
- ・ ハイキングで通った道を使って友だちを連れて行ったりしているのを聞いて、活動が繋がってきているなど感じた
- ・ 親には相談できないことも助けてくれる人がたくさんいる
- ・ 学校や部活や親でなく、ほかの大人が長所を見つけてくれる

(2) 保護者の満足度

- ・ここまでやらせて良かった。縦のつながり、横のつながりが生まれている。子どもは、辞めた子ともつながりが残っている
- ・思いは満たされている。ボーイスカウトの活動を通じ、親も子も変わった。親の圧力が弱まり、子どもがのびのびできたのでは
- ・親も子も満たされている。「あれがこれに繋がるのか」ということは、これから知ることになるだろうし、そこでまた満たされるだろうと思う
- ・親子でまだまだ成長している
- ・他団の活動もできる制度があると良い。自団の活動だけだと、所属する団によって、できることに差が出るのでは

以上